

シリーズ第29話

大腸がん

今回は大腸がんのお話です。

大腸は消化管の一部で、細菌による食物繊維の発酵や一部の栄養素と水分の吸収が行われる部位です。吸収されずに残ったものが便を形成し、排泄されるまでのあいだ便が貯留する部位でもあります。構造としては結腸、直腸が含まれ、結腸はさらに盲腸・上行結腸・横行結腸・下行結腸・S状結腸に区分されます。

大腸がんは日本国内で男女とも急速に増加し、直腸がんによる死亡は世界一であり、もつとも患者数と死者数の多いがんの一つになっています。その原因は、食生活の欧米化などが考えられ、加齢とともに発生率が増加し、多くは60歳代から70歳代で発症します。また、生活習慣との関連がWHO（世界保健機関）から指摘され、BMI(体格指数)Ⅱ数値が大きいほど肥満が25未満を1とした場合、BMI 30以上になると発生リスクは1.5倍に跳ね上がる結果が出ています。そのほかの危険因子としては遺伝の背景があり、家族性大腸ポリポーシスという病気など、40歳で半数ががん化すると言われているものもあります。大腸がんの発症しやすい部位は、S状結腸や直腸で、大腸がんの7割強を占めています。

症状は、普段便秘でない人が便秘になったり、下痢と便秘を繰り返すようになったり、下血、腹痛、腹満感などですが、大腸がんに特異的な症状はありません。出血しても痔と思いついで手遅れになる場合もあります。大腸がんのできる部位によって症状が違いますので注意が必要です。盲腸や上行結腸、横行

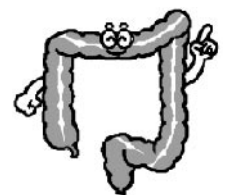
結腸の右側にできたがんは貧血や腫瘍触知で分かることが多く、症状がある程度進行した状態で診断されることがあります。これらの部位では腸の内容物が液状のため、通過障害が起こりにくく発見が遅れてしまいます。S状結腸や直腸では比較的症

状が出やすく、下血、血便、便秘、下痢、便柱狭小などがあります。進行すると場所に関係なく腸閉塞や腸穿孔から腹膜炎を起す危険もあります。いろいろな症状がありますが、初期の段階から大腸がんとして確実な症状が現れるものではありません。対策としては、生活習慣の改善と維持、早期発見のための定期検診が重要となります。普段から適度な運動をして、栄養バランスのとれた食事をと



新城市民病院
消化器科・外科
診療部長 横井佳博

り、食べ過ぎや飲み過ぎることがないようにしましょう。まず肥満を解消し、標準体重を維持しましょう。



また、40歳を過ぎたら年に一度の大腸がん検診を受けましょう。一次検診は便潜血検査で、がんやポリプの有無を診断します。便を2回とって提出するだけの安全で簡単な検査です。厚生労働省の調査では、この検査を受けた人は、受けない人に比べ大腸がんによる死亡率が7割ほど低かったと報告されています。便潜血が陽性であれば内視鏡検査などの精密検査をします。

大腸がんは早期発見できれば治る病気です。簡単な検査で大腸がんを早期に見つけ、早期治療へつなげましょう。大腸がんの一次・二次検診は市民病院でも行っています。消化器科・外科外来または、健診センターまでお気軽にお問い合わせください。